

人間の経済

第2期 第 **42** 号 (通巻 120 号) 2006年4月2日

目次

貨幣の商品支配と自然の減失

藤本 文夫

週刊マーケットレター(06年4月3日週号)

主要マーケット指標

06年度の企業業績への期待強まり株価上昇
ゼロ金利と外需に委ねた設備投資の危うさ

曾我 純

貨幣の正当性を考える

森野 榮一

読者の声

貨幣の商品支配と自然の減失

藤本 文夫

自由経済研究受け取りました。

一般の図書館に解説書を含めゲゼルに関する本が全くないのは残念です。

商品とはなにか。貨幣とはなにか。その目的と効用、功罪などを物理学的に研究しないと将来の地球がどうなるか心配です。自然破壊も環境問題も貨幣への商品の従属の結果だと思ふのです。

誰もが貨幣に対してだけ商品を作ります。隣人は互いに個別の商品の母体に過ぎません。かつての共同体は完全に消滅しました。核家族は共同体の喪失の象徴と考えます。商品と貨幣の意思疎通の合意、背景がないのです。地球環境は悪化の一途をたどると思ひます。

マルクスは「資本主義的生産様式の支配的である社会の富は巨大な商品集積として現れ、個々の商品はこの富の成素形態として現れる。したがってわれわれの研究は商品の分析をもって始まる」と述べました。

しかし実態は、貨幣のために生産する大量の商品は市場への貨幣を求める集積物として現れ、個々の商品が個別対象の生存に必要な資料の成素形態として現れる。したがって商品の分析は貨幣を労働形態に加工する概念上の工作である、であって、貨幣への奴隷化工作を図ってはいませんか。

労働価値は貨幣を求める行動を要求し、抽象的労働は労働の数詞への加工を要求します。商品がなぜ貨幣になるかは説明できても、貨幣がなぜ商品なのかは説明できません。商品に対する貨幣の支配は本末転倒です。交換物の自然状態は商品と貨幣の二つの要素が同時に含まれていたのではないのでしょうか。人間の英知は科学的考察をなして地球を救えるという考え方があります。自然を減失していくとすれば、人間の英知も茫然自失でしょう。

余命の見える年寄りの妄想です。お許しください。

(2006年1月29日)

週刊マーケットレター（06年4月3日週号）

2006年4月2日

曾我 純

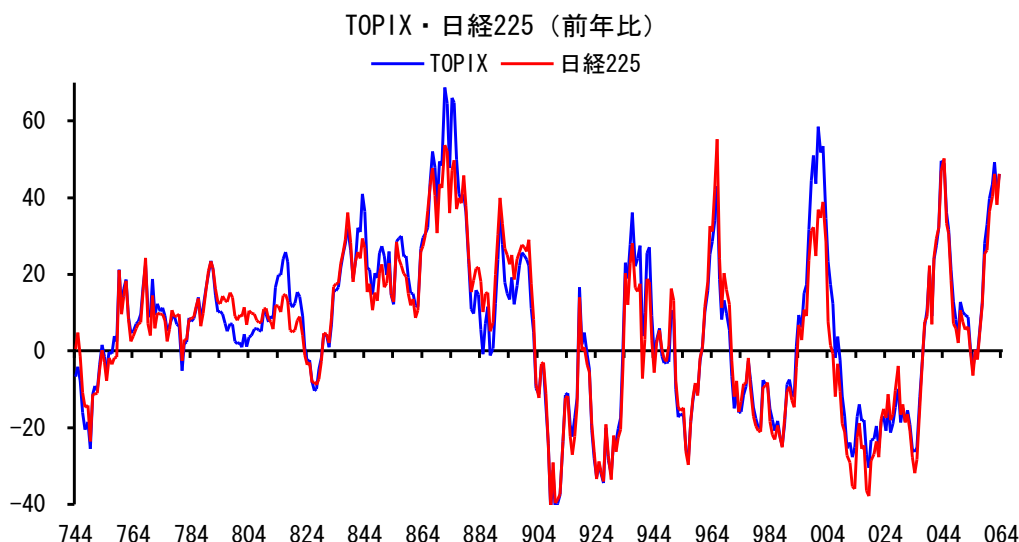
■主要マーケット指標

為替レート	3月31日（前週）	1カ月前	3カ月前
円ドル	117.75(117.50)	115.80	117.75
ドルユーロ	1.2115(1.2035)	1.1925	1.1845
ドルポンド	1.7375(1.7425)	1.7545	1.7225
スイスフラン	1.3040(1.3105)	1.3115	1.3135
短期金利（3カ月）			
日本	0.11188(0.11188)	0.09250	0.06625
米国	5.00000(4.96475)	4.82250	4.53625
ユーロ	2.81700(2.74013)	2.66363	2.48663
スイス	1.24917(1.23000)	1.17583	1.01000
長期金利（10年債）			
日本	1.770(1.730)	1.585	1.470
米国	4.85(4.66)	4.54	4.39
英国	4.40(4.32)	4.18	4.09
ドイツ	3.77(3.63)	3.48	3.30
株 式			
日経平均株価	17059.66(16560.87)	16205.43	16111.43
TOPIX	1728.16(1689.34)	1660.42	1649.76
NYダウ	11109.32(11279.97)	10993.41	10717.50
S&P500	1294.83(1302.95)	1280.66	1248.29
ナスダック	2339.79(2312.82)	2281.39	2205.32
FTSE100（英）	5964.6(6036.3)	5791.5	5618.8
DAX（独）	5970.08(5973.14)	5796.04	5408.26
商品市況（先物）			
CRB指数	333.18(326.98)	324.36	331.83
原油（WTI、ドル/バレル）	66.63(64.26)	61.41	61.04
金（ドル/トロイオンス）	581.8(560.0)	561.6	517.1

■ 06年度の企業業績への期待強まり株価上昇

日経平均株価は3月24日から6営業日連続の上昇となり、年度末は17,000円を越えて商いを終了した。特に、株式市場にとって好都合な材料があらわれたわけではなく、わけもなく値上がりした感じである。相場を引き上げたのは、TOPIXに占めるウエイトの大きい銀行（浮動株ベース、TOPIX構成比13.5%）と電気機械（13.2%）が伸びたほか、不動産業や非鉄金属も人気を集め大幅高となったからだ。

株式市場には逆風となる長期金利の上昇や景気に不安を抱かせる経済指標には目もくれず外人買いに先導されて高値を追いかけている。銅などの非鉄や金価格の急騰が関連企業の買いを集め、ゼロ金利による長短金利差の拡大が銀行株の魅力を高めているのだろう。だが、31日の日経平均株価は前年比46.2%と1月末と同じ上昇率となり、きわめて高い水準を



維持しているといえる。前年を50%前後上回る高い伸びを数ヵ月も保っているケースは稀であり、このような高い上昇率がいつまでも続かないことは歴史が証明している。

内閣府発表の景気先行指数は昨年3月を底に上昇しており、今回の景気拡大過程では3度目の上昇局面となる。こうした景気先行指数の上昇をみて、外人は企業は06年度も強めの収益予想を打ち出すと考えているようにも思う。05年度の決算が4月から5月に発表されるが、決算発表の時期が株価の分かれ目になるかもしれない。

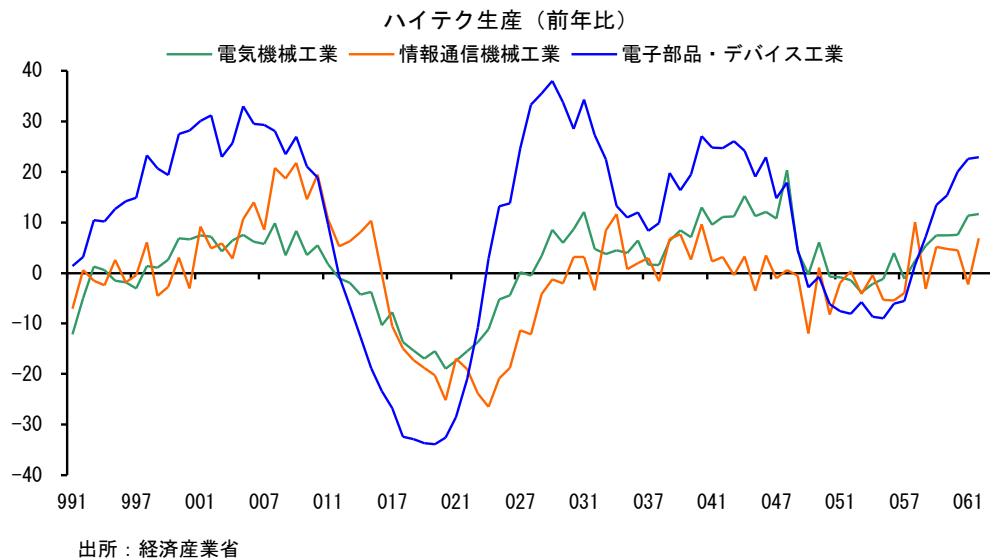
■ ゼロ金利と外需に委ねた設備投資の危うさ

27日に発表された1-3月期の「法人企業景気予測調」によると、大企業製造業「貴社の景況判断BSI」（「上昇」-「下降」）は3.1%と前回調査時の予想を下回り、前期比7.4ポイント低下した。大企業非製造業は7.9%、前期比2.6ポイントの低下となり、大企業の業況は悪化した。4-6月期以降の景況判断は改善する見通しだが、原油が60ドル台半ばに上昇するなど、原材料高が収益を圧迫することも予想され、先行きは不透明である。景気の影響を受けやすい中小、中堅企業（製造業）の景況判断は大幅に悪化し、マイナスに転落した。

大企業製造業の「国内景況判断」は17.9%、前期比6.0ポイント低下し、先行きもプラス幅は縮小する見通しであり、「貴社の景況判断」とは異なる見方をしている。05年度の大企業製造業の売上高と経常利益は5.9%、7.3%それぞれ増加を見込んでおり、06年度も3.6%増収、

6. 7%増益計画を立てている。

2月の鉱工業生産指数は前月比-1.7%と7ヵ月ぶりに前月を下回った。在庫は緩やかだが4ヵ月連続の増加となり、生産を押えるように作用するだろう。輸出は好調だが、内需の動きは鈍い。2月の家計調査でも全世帯の消費支出は前年比-1.1%と2ヵ月連続減と冴えない。勤労者世帯の可処分所得は昨年7月以降8ヵ月連続の前年割れとなり、2月の現金給与総額（「毎月勤労統計」）の伸びも前年比+0.4%にすぎず、これでは消費を刺激するには力不足だ。非雇用者数が2月、前年比119万人増加し、これに自営業主・家族従業員を加えた就業者数も48万人の増加をみたが、消費はなかなか動かない。2月の商業販売統計によると、小売業は前年比1.0%プラスになったが、燃料小売業の2桁増の寄与が大きく、これを除けばマイ



ナスになる。

鉱工業生産指数を牽引しているのは電子部品・デバイス工業である。2月の鉱工業生産指数は前年比3.7%伸びたが、電子部品・デバイス工業は22.9%も伸び、生産指数に対する寄与度は2.6%と高い。今後の生産指数の動向も電子部品・デバイス工業次第となろう。

電子部品・デバイス工業の生産の伸びは頭打ちとなっている一方、在庫は昨年10月の前年比5.7%減から2月には+11.0%まで増加しており、電子部品・デバイス工業の生産は鈍化する可能性が高い。電気機械工業、情報通信機械工業に加えて、一般機械工業の生産は電子部品・デバイス工業にやや遅行する傾向があり、こうした産業も減速に向かうことになれば生産は急速に低下するだろう。

製造業は雇用の増加と設備投資の拡大を積極化し強気の経営姿勢を打ち出している。だが、需要は外需と設備投資が中心であることを忘れてはならない。設備投資の拡大を可能にしているのはゼロ金利であり、ゼロ金利は株式相場を活況にすることによって、設備投資意

欲を刺激しているのである。ゼロ金利は企業にとって掛け替えのない政策といえるだろう。

3年連続の拡大によって、GDPに占める民間設備投資の比率は05年、14.8%に上昇した。10年前と比べてもほぼ同じ比率であり、民間設備投資のウエイトは米国（05年、10.6%）に比べて高い。民間設備投資の比率が高いことは、景気変動の波が高くなることでもある。ゼロ金利と外需に委ねた設備投資の拡大は、危うさや不安定さを孕むことを思い起こす必要がある。

貨幣の正当性を考える

森野 榮一

貨幣には正当性がなければなりません。それがなければ流通することも使われることもないでしょう。

しかし、貨幣の正当性によってなにが理解されるべきなのでしょう。そこで、正当性という言葉ですぐ思い浮かべるのは、例えば仏語では

validité と légitimité

でしょう。

validité はラテン語 *validitās* に由来します。体力や有効性を意味します。その動詞形、*validāre* は「強化する、元の状態に戻す、つまり現状回復する」の意味です。

légitimité は *legitime* に由来しますね。統治の正当性を被統治である存在が認め受容するかどうかの、統治の正当性が本来の意味です。

したがって、法による統治のなかでは、法そのものの正当性や法に準拠しているかどうかの正当性を指す、その意味でかなり公式化 (*formaliser* あるいは *officialiser*) された正当性及びその次元を指すといえるかもしれません。

これと対照的に、*validité* はなによりも、「実効性」に意味やその根拠をおいています。公式、非公式を問わず、＜体力によって状態をもとの状態に戻す＞ことを正当性としています。

以前、人々の貨幣に関する先入観を破壊するために、よく講演でこんな話をしました。

小学校の教室。

こどがじぶんのノートに1000円と書いて四角く切り取っています。

こども 「これ、ぼくのおカネなんだ、1000円だよ。すごいでしょ。」

せんせい 「それは、ノートに君が書いただけじゃあないの。」

「....」

「おカネなのかな～」

こども 「おカネだよ～」

さあて、このおカネはおカネでしょうか？

おじさん 「おカネでもあり、おカネでもありません。」

こども 「じゃあどういうときに、おカネになるの？」

おじさん 「簡単です。君がおじさんからこのバナナを買おうとする。あ～、いいよ代金は、そう、君のおカネ、それ、それ、それでいいよって言って、代金としてそれを受け取ってくれたら、それはおカネさ。」

こども 「じゃあ、なんで受け取るの？せんせ～は、ぼくが書いて、作っただけじゃないのって言って信じてないから、受け取らないだろ～けど… おじさんはどうして受け取ったの。」

おじさん 「君がかわいいから… じゃあないんだよ。君がおりこうだからでもないのさ。君の1000円をおじさんは、別のときに、別の場所で君じゃあない別の人に使える、そう、おじさんがなにか買ったときに代金として受け取ってもらえると信じて、期待しているからなんだよ～」

こども 「他の人はどうして受け取るんだろう？」

おじさん 「おじさんと同じ事情さ。代金としてだれもが受け取ってくれると信じて期待している… 」

こども 「でも、そ～いう人ばかりじゃないと思うよ。」

おじさん 「そうだね、だから人は国というものを作って、法律というものまで作って、国のおカネは代金で受け取らなきゃいけないときめた。」

こども 「ぼくのおカネは国のおカネじゃないよ。」

おじさん 「だから受けとらない人もいるかもね。でも受け取る人もいるかもね。なにがそれを決めるかっていったら君の信用さ。だって君のおカネ、君にも使えるんだろう？」

こども 「うん。ぼくの知識や体力で提供できるものなら、売ってあげるよ。」

おじさん 「よし、君は立派だ。」

ここで、こどものおカネは正当性 (validité) をもつ可能性をもっています。彼は体力で現状を回復する意思と力をもつと言明しているからです。販売によって失われたものを購買で回復することが信じられるわけです。つまり、人は販売すると売り渡したものを失いますが、しかし代価や代物がその償いとなり、販売前の状態に戻るわけです。彼はそのことを言明しました。だからおじさんは、立派だと言ったのでしょう。

国のカネは、法律によって(つまり公式化されることで) 流通を強制されます。そこには正当性がありますが、なによりもまず *legitimité* としてです。そうしてから、人の、国のおカネの支払い能力によってその人の信用が決まってきます。カネの信用は国の次元に吸い上げられていますので、受領の可能性を斟酌せずともよいのです。

この場合は、
カネからみたニンゲンが問題にされる
ことになります。
つまり人間の信用がカネではかられることになるわけです。

しかし、こどものおカネは
ニンゲンからみたそのおカネが問題にされます。
つまりその人間の信用でカネの信用がはかられることになります。

ここに不思議な対称性が存在していることになります

おじさんならこう言うでしょう。

君はじぶんの事柄をじぶんで決めるニンゲンでありたいかい？ だったら、君の信用が君の体力や知力で現状を作っていけるようにもしたいね。そうだ、だから、*validité* を問題にしようじゃないか、その元々の意味におけるそれさ。

たしかに、一方は、全体性という抽象に正当性の根拠を置いています、つまり誰もが受容している統治の正当性乃至正統性に依拠しているわけです。

他方は、*validitās* (体力) という個々人の具体性、身体性に依拠しています。

前者は常に公式化されたガバナンスから離れられません。しかし後者はその根拠である具体性、身体性にはばらつきがあります。

ではいったいどちらがよいのでしょうか。

事は選択の問題ではないようにみえます。そこに一種の補完性を認めることができるでしょう。

quote of this week

相互性を欠くは盗奪

安藤昌益の『統道真伝』にある「宝という失りの論」を読み、なにごとく <他から> 得ているのであり、施さず他から得るは盗奪ということかと知りました。

宝（^{たから}他から）も、財（^{たから}他から）も他からであると。

金銀及び珍物、人の利用^す為るもの皆之れを^{たからたから}宝財と謂うなり。宝は^{たから}他従己れに得て己れを利する。之れを好み喜んで^{たからたから}他而他而と云う、是れ他無し、己れを利し道と他貨を盗むの言いなり。転道は己れから他に^{そむ}施すなり。之れに反いて^{たから}他而己れを利す^{とき}則は転道及び他の物を盗むなり。故に^{たから}他而と言うは盗の異別の名なり。故に宝を^{そむ}責ぶは盗を為すなり。…

なるほど、この世の中、相互性を欠くは盗むに同じなのですね。なぜなら、私たちは、ほとんどを「他から」得ているから … しかしいまや、宝は「他無し」。

（森野 榮一）

ゲゼル研究会では第二期「人間の経済」誌の原稿を募集しています。

ゲゼル研究会では会誌、「人間の経済」を刊行してまいりましたが、会員の各地に叢生する地域通貨の動きへの関与等により、刊行継続の体制がとれず、1年ほど休刊のやむなきに至っておりました。

しかし、社会経済状況の変化や多様化する各地の貨幣改革の展開を見るに、時宜を得た会員の諸研究を世に問う必要性を痛感しているところです。

また、各地からの問い合わせ、情報提供の依頼も多く、会としての系統的な情報の提供、焦眉の課題に関する研究成果の迅速な公開の必要性も強く感じてきたところです。

今般、体勢を立て直し、会誌「人間の経済」再開（第二期創刊）に取り組むこととなりました。

基本的な会誌の性格は第一期と変わるものではありません。

理論的な研究から各地の取り組みの現状、そのナマの声まで、多様なテーマの論考を掲載していきたいと考えております。

広く論考を求めていますので、諸姉諸兄のご支援、ご協力をお願いいたします。

第二期、「人間の経済」、簡易印刷版、及びHPでのPDF版提供

不定期刊

投稿資格 特に設けず

投稿 常時受け付け

投稿論文の著作権は著者に帰属

原稿料はありません

ご連絡は info@grsj.org まで。

編集・発行 ゲゼル研究会

221-0021 横浜市神奈川区子安通3-321 森野榮一 気付

Gesell Research Society Japan

<http://grsj.org/>

info@grsj.org

Gesell Research Society Japan all rights reserved 許可無く複製・再配布を禁ず